

中学校教師のワーク・エンゲイジメントの 特徴および関連要因の検討

専攻 人間発達教育専攻

コース 教育コミュニケーションコース

学籍番号 M18003F

氏名 寒川 鉄平

1. 問題と目的

従来のメンタルヘルスの研究は、精神的・身体的不健康やストレスなどに焦点を当てて研究が行われてきた。高齢者の増加や、女性の社会進出の増加など働き方が変わる中、予防的な対処だけでなく、もともとの位置からプラスに考えようと、人間の有する強みやパフォーマンスなどポジティブな要因に注目した研究も散見されるようになってきている。

そのような中、職場のメンタルヘルスにおいて、精神的不調者だけでなく、健康度が高い労働者による生産性の高い職場づくりを目的とした視点で、ワーク・エンゲイジメントの研究がすすめられてきた。ワーク・エンゲイジメントとは、「仕事に関連するポジティブで充実した状態であり、活力・熱意・没頭によって特徴づけられる。ワーク・エンゲイジメントは、特定の対象、出来事、個人、行動などに向けられた一時的な状態ではなく、仕事に向けられた持続的かつ全般的な感情と認知である」と Shaufeli & Bakker(2004)は、定義している。

これまでのワーク・エンゲイジメントの研究によると、ワーク・エンゲイジメントが高い人は、仕事や組織に対する認知や態度、仕事のパフォーマンスなど仕事領域のアウトカムに寄与するだけでなく、心や体の健康などの個人のアウトカムにも影響し、心身の不調が少なく(島津,2014)、精神的健康状態が良いことが明らかにされている(Bakker&Leiterm,2008)。

現在のワーク・エンゲイジメント研究の蓄積をみると、看護師に関する研究が多い(向江,2018)。これは、看護師という職種はストレスが多く、精神的疲弊状態にすることが知られているからである。

だが、これは、同じく教師の職種においてもいえることである。平成28年度の教育実務実態調査によると教師の平日の労働時間は、管理職で11時間50分、教諭で11時間30分、講師で11時間17分といずれにおいても過度な時間をかけて職務を行っていることがわかる。教師の多忙さは、今、社会問題となっている。しかし、久富(2018)は、2004年・2014年の調査を踏まえ、「やりがい・生きがいをもって教職生活を送り、学校現場の雰囲気を良好にしようとするなど、自分をめぐる状況をよりポジティブに把握するようになっていくという変化がうかがわれる」p460と述べている。

たしかに、現場の中を見ると、働くことがストレスというよりも、むしろ仕事に対し、活力を持ち、熱心に働く教師は多い。こういった教師にはどのような特徴があるのか。ワーク・エンゲイジメントという概念で捉えた時に見えてくるものがあるのだろうか。また、関連する要因にはどのようなものがあるのだろうか。

現在、教師のワーク・エンゲイジメントに関する研究数は数が少ない。そこで、本研究では、先行研究において、ワーク・エンゲイジメントと関連が認められている心理的 well-being を用いて、中学校教師のワーク・エンゲイジメントの特徴を

とらえ、その後、中学校教師のワーク・エンゲイジメントと関連する要因を検討することを目的として研究を行うものとする。

2. 研究方法

2019年9月から10月にかけて、A市に勤務する教職員(用務員を除く)178名を対象として、研究を行った。そのうち、すべての回答から記入ミスがあった21名を除き、157名(男性97名,女性60名)が研究対象となった。

3. 研究調査内容項目

(1)基本属性

(2)職場・家庭での状況

(3)ワーク・エンゲイジメント尺度(UWES-J)(Shimazu et al,2008)9項目

(4)心理的 well-being 尺度(西田,2000)43項目

(5)職業コミットメント(佐藤ら,2015)17項目

(6)ワークライフバランス尺度(SWING-J)島津ら(2018)22項目

4. 結果

各尺度の基礎統計量をみたところ、十分な値を得ることができた。職業コミットメント(規範性職業コミットメント)については、やや低い値であったが、許容範囲と思われたので、留意することとしながら検討することとした。

(1) 教師のワーク・エンゲイジメントと心理的 well-being との検討

ワーク・エンゲイジメントの合計点および、ワーク・エンゲイジメントの下位尺度と心理的 well-being の間に正の有意な相関がみられ、教師においても関連があることが示された。次に、心理的 well-being の高さが、そのままワーク・エンゲイジメントの高さと言えるのだろうか、中程度であった方が良いのではないかという視点から、ワーク・エンゲイジメントを3群に分け、3群と各尺度の2要因分散分析を行ったところ、心理的 well-being はいくつかの下位尺度において、群間の得

点差は有意であった。

(2)ワーク・エンゲイジを高める関連要因の検討

ワーク・エンゲイジメントと各尺度および、職場・家庭での状況、雇用状態、経験年数、職業ポジションにおいて、相関や分散分析で関連をみたところ、有意な関連を確認することができた。

(3)ワーク・エンゲイジメントを高める関連要因の検討(男女ごと)

続いて、これまでに得られたデータとは違い、男女別でみた場合の関連をみたところ、いくつかの分析において、有意な関連を確認することができた。

5. 考察

今回の結果、ワーク・エンゲイジメントと心理的 well-being には相関があることが認められた。よって、中学校教師においても、ワーク・エンゲイジメントの高さが、精神的健康につながることを確認された。また、性別に分けて分散分析を行ったことで、男性・女性によるワーク・エンゲイジメントの得点の違いを確認することができた。

教師は、働きすぎだといわれているが、「活力」「熱意」「没頭」といったワーク・エンゲイジメントをもって、取り組んでいる人はむしろ精神的に健康であり、また、それらは、性別によっても違うことが考えられる。

6. 今後の課題

ワーク・エンゲイジメントの先行研究では、ワーク・エンゲイジメントを高める要因として、仕事の資源の中の「職場からの支援」があげられているが、今回の研究では関連を確認することができなかった。ただ、これに関しては、質問事項が少なかったため、再度検討が望まれるものである。

また、この研究を生かし、ワーク・エンゲイジメントと各項目の因果関係も検討していく必要がある。

主任指導教員 中間玲子

指導教員 中間玲子